

親しい友人たち

山川方夫

目次

親しい友人たち

待っている女

恐怖の正体

博士の目

赤い手帖

蒐集

ジャンの新盆

夏の葬列

はやい秋

非情な男

菊

メリイ・クリスマス

愛の終り

128 115 106 100 88 78 67 54 40 29 20 8

十三年

お守り

ロンリー・マン

箱の中のあなた

予感

暑くない夏

トンボの死

社内旅行

カナリヤと少女

新年の挨拶

昼の花火

216

208

202

192

186

180

174

166

160

146

140

親しい友人たち

親しい友人たち

● 待っている女

寒い日だった。その朝、彼は妻とちょっとした喧嘩をした。せっかくの日曜日なので、彼がゆっくりと眠りたいのに、妻はガミガミと彼の月給についての文句をいい、枕をほうりなげて、挙句のはて、手ばやく外出の仕度をして部屋から出て行ってしまったのだ。

蒲団に首をうずめたまま、彼は、またか、と思った。また半日も帰らないのだろう。近ごろ、妻はよくこの手を使う。どうせ実家にでも行き、思うさまおれの悪口をならべてくるのにきまっている。が、それで彼女の気がすむなら、それもよからう。おれはおれでもう少しの時間、この蜜のような眠りをむさぼればそれでいいのだ。

窓はもう明るく、一人きりの静かな部屋の中で、彼は、ごくやすらかにまた眠った。

目がさめたとき、枕もとの時計は十一時をまわっていた。――腹のあたりが空虚すぎて、もう、どうにも睡ることができない。

まだ、妻は帰っていない。彼は舌打ちをした。いまいましいことだが、結局、いつものように近くの煙草屋まで行き、ソバ屋にでも電話をしなければ食事にはありつけない。

仕方なく、彼は顔を洗い、ふだんの服に着替えた。寒風の中をジャンパーの襟を立てて、二、三十米はなれた煙草屋へとあるいた。

煙草屋は、四辻の一角にあつて、銀行の私設野球場をかこむ金網の塀の角に、ちょうど対角に面している。赤電話でソバ屋のダイヤルを廻し終えて、彼はふと私設球場の金網に片手をかけ、背を向けて、その若い女が立っているのを見たのだった。

脚のすばらしく美しい女だった。襟の大きな、焦茶色の、しかしいささか毛脚の古ぼけた外套に身をつつんで、長い髪がやわらかく肩にかかっている。

女はでも、私鉄の駅に向う一本の道に、じつと顔を向けつづけている。きつと、誰かを待っているのだ。……なんとなく、彼はすてきな青年が呼吸をきらし、走り寄ってくるさまを空想した。それは、見事な、頬笑ましい「愛」の風景に違いなかった。

突然、うしろから声と呼んだ。煙草屋の小母さんが、ケースの上に乗れ出すようにしていた。「……あの娘さんねえ」と、彼に目配せのような笑いを送りながら、小母さんは、声をひそめた。「ああして、もう二時間も前から、ずっとあそこに立っているのよ」

「二時間も前から？」

そのとき、女が振りかえった。

彼は、讀嘆の表情をかくすことができなかった。髪が少し乱れ、化粧もしていない顔だったが、女は充分に若く、美しく、魅力的な、あざやかな目鼻立ちをしていた。大きな瞳が、

びっくりしたように彼をみつめている。色が白く、ぼつりと小さな唇が紅い。

だが、彼への無関心を示すように、女はすぐ、くるりと横を向いた。鼻が高く、耳のうしろのほつれ毛が可憐に風にそよぎ、女はまだ十代のように思えた。

女は、しかし歩き出さなかった。彼はあわてて『憩』を買い、どきまぎと我にかえりながら、まっすぐに下宿へといそいだ。……どうせ、あんな美しい娘なんて、おれなんかとは関係のない遠い生物でしかないのだ、とくりかえし心に呟きつづけながら。

下宿の二階には、彼ら夫婦をふくめ四世帯が住んでいるので、二階にも炊事場と便所がある。その便所には窓があつて、そこからまっすぐに煙草屋のある四辻がながめられる。

彼が、本当にその女が気になりはじめたのは、それから一時間近くたってからだ。用を足して、なにげなく窓からその四辻を見下し、彼はショックを胸に受けた。焦茶色の外套の女が、まだそこに立っているのだ。

奇妙な、錐を胸に揉みこまれたようなショックだった。部屋にもどり、すでに隅々まで読みつづけた新聞をひっくりかえしながら、だが、彼の目は活字やその意味を追っていたのではなかった。遠目には違いないが、うなだれたあの若い女が、しょんぼりと靴先でくりかえし道に線を引いていた姿が、彼の目に灼きついたように残っていた。

彼はまた便所に入った。女は、靴先での遊びをやめ、首をまげこちらの道を見ていた。大

きな欠伸をした。

一時間後、たまらなくなつて彼はまた便所からのぞいた。女は、ぐずぐずと迷うようにあたりを眺めながら、こんどは小刻みに小さな環を描いて、未練げに道の同じ場所をゆつくりと廻っていた。

曇つた冬の空が低く、ひどく底冷えのする日だった。炊事場のながしも薄く凍っている。女は、さぞ寒いだろう。さぞつらいだろう。――

我慢できないような気分で、彼は下宿を出た。せわしなく四辻へとあるいた。女の姿が見えない。が、彼がやっと四辻まで来たとき、ちょうどそこに女が歩いてきた。彼は諒解した。女の歩いてきた方角には、公衆便所のある小公園があるのだ。

ちらりと彼を見て顔をそむけ、女は、それまでと同じ場所で立ち止った。石像のような姿勢で、話しかけるなんのキッカケもなかった。彼は、煙草屋に顔を向けた。

……空しく机の上にふえた『憩』の箱を眺めながら、彼は大きく呼吸を吐いた。女は、いつまで待っているつもりなのか。時計が、遅滞なく冷酷に時を刻みつづけるのだけを彼は聞いた。

次第に、彼はいても立つてもいられない気持になりはじめた。もう、三時をまわっている。とすると女は六時間もあの四辻に立ちつづけているのだ。彼はまた便所へ行き、女が同じ場所にいるのをたしかめると、夢中で階段をかけ下り、ふたたび下宿の表に出た。彼は、

寒さを忘れていた。

女に近づくにつれ、しかし彼は、自分がなにをしようとしているのか、わからなくなつた。たぶん、おれはいいたいのだ、はやく家へお帰りなさい、この寒空の下に、あなたを何時間もほうり出しておく男なんて、けしからん、……でも、こんな言葉が、なんの役に立つのだ？ よけいなお世話です。あなたの知ったことじゃないわ。きつとおれは、女の鼻白んだそんな声に、完全に突き放されてしまうのにきまつている。……

思うと、脚を出す速度が急に鈍り、歩一步となにかが沮喪してゆくのがわかつた。女は、赤い頬をしていた。だが、いまは腹を据えたように両手を組み、金網をみつめている。彼はまた『憩』の箱を買った。——結局、彼はなにもいえず、空しく下宿の部屋にかえつた。

四時半になつた。彼は机に四個の『憩』を置き、新しいカケうどんの汁をすすっていた。女は、思いつめたような顔になつて、まだ同じところにいる。箸をほうり出すと、彼は仰向けに畳に寝ころがった。

いずれにせよ、と彼は思う。若い美しい女が真冬の路上に何時間も立ちつづけているのなんて、異常だ。そうじゃないか？ この忍耐、この献身は、いったいなんのためだ？ それに、なぜ女は、わざわざあの四辻に立たなければならぬのだ？

もしかしたら、女は、待っているのではなく、待たれているのかもしれない。なにかを、

見張っているのかもしれない。立っていること自体で、なにかへの合図をしているのかもしれない。……麻薬の取引にでも加わっているのだろうか？ 密輸団は、おそらく、多額の金か恐怖で彼女を備ったのだ。

また、彼は思う。そうだ、たぶんあの女は、恋人が事故に遭ったか、急病になったかしたのだ。きっと、それを知らないのだ。

さまざまに空想してみながら、だが、彼はじつはある考えを避けようとしていた。自分でも、それがわかっていた。結局、彼はあの若く美しい女が、恋人にすっぱかされ、冬の四辻で八時間も待ちぼうけをくらいながら、しかし立ち去りかねている哀れな女だと、考えたくなかったのだ。恋人に捨てられ、かなしみに悶えながら、でも一縷の望みをつなぎじっと待ちつづけている——彼は、彼女には、若い美しい彼女にだけは、そんな「不幸」は想像しなかったのだ。

……しかし、おそらくそれ以外に、女の立ちつづけている理由はない。だんだんと、彼はそれを認めざるをえない気持ちに追いこまれた。女の「不幸」が、なまなましく、動かしがたいものになって、それが苦痛だった。いらいらして、彼は煙草をねじり消した。

吹きすさぶ刃物のような白い風の中に、女は、まだ諦めきれずに立っているのだ。胸が疼き、喉がしめつけられるような気がしてきた。彼は立ち上った。よし、どうしてもいってやるのだ、と彼は決心した。君、あきらめたまえ。はやく帰って暖まりたまえ。そして違う男

をさがすことだ。いま、君のとるべき道は、それ一つしかないのだ。君みたいに若く、美しい女性が不幸だなんて、そんなことはゆるせない。君みたいな人が幸福になれなくて、いったい誰が幸福になれるというんだ。どこに幸福があるんだ。……さあ、不実な恋人のことなんて忘れるんだ。幸福になるんだ、君。

夕闇があたりをつつみはじめ、四辻が白っぽくその中に浮かんでいた。やはり女はいた。膝を折って、道にかがんでいる。

びっくりして走り寄って、だが、彼はあわてて脚をとめた。女は、ケロリとした表情で無邪気に首をかしげ、道で鞠つきをしているのだ。鞠は、軟式野球用の、硬いトップ・ボールだった。女は、低声で歌を歌っていた。

すぐそばに立った彼に、女は知らん顔をつづけていた。白い球が、固い音を立てて道にはずみ、女の掌と路面とを往復する。ふと、球が横に逸れた。彼は、それを拾い上げた。

女ははじめて顔を上げた。べつに苦しいでも、悲しいでもなかった。

「返して下さい」

と、女は透明な声でいった。

「……」ななかを、待っているんですか？」
と、やっと彼はいった。

「ええ」女は低い声でいった。

「ずいぶん長いこと待っていますね。……寒くありませんか？」

「います」

女は立ち上り、手をのぼした。

「そのボール、ここで拾ったんです。あなたのじゃなかったら、返して下さい」

「朝から、ずっとあなたは……」

「いますすわ」

女は、奪うように彼の掌からトップ・ボールを取り、片方の膝を深く折ると、また鞠つきをはじめた。その姿勢は、あきらかに彼を拒んでいた。彼を無視していた。

突然、燃え上るような羞恥、逆上した、怒りに似た羞恥が彼をとらえた。そのまま、彼は下宿へと走り出した。部屋にかけこむと、畜生、畜生、と叫びながら机を拳骨でなぐりつけた。彼は、真赤な顔をしていた。

そうだ、まさにおれはよいいなことをしたのだ、と彼は齒がみしながら思った。おれは、彼女を侮辱したのだ。彼女の神聖な「愛」を侮辱したのだ。彼女は、彼女自身どうにもならぬ彼女の「愛」を忠実に生きているだけのことだ。……おれは、まるでその「愛」を、取り替えるきくもののように扱おうとした。なんという馬鹿だ、なんという無礼だ、ああ。

彼は恥じた。彼は孤独だった。でも、あの女と同様、おれもまたこのおれを引き受けねば

ならないのだ。——ふと、妻はいつ帰ってくるのだろう、と思った。

九時を過ぎたが、妻は帰らなかった。そして、おどろいたことに、女はまだ同じ場所にいるのだ。……便所の窓からのぞくと、ときどき、自動車のライトに照し出され、女の姿が閃光を浴びて浮き上るのが眺められた。

蒲団にもぐりこんで、彼は、もう女のこととは気にするまいと思った。たとえ女が凍え、路上で餓死をしたにしても、それを見殺しにしてやることしかできないのだ。その人間の不幸は、だれにも、当人にさえ、どうすることもできない。それを知り、それに耐えることこそ、人間の真の「勇氣」なのだ。……

だれとも知れぬものへの呪詛を呟きつつ、いつのまにか彼は眠っていた。妻が部屋に入り、扉を閉めたのはそのあいだだった。

「ただいま」と、妻は大きな声でくりかえして、彼の肩をゆすった。

彼は時計をみた。十一時だった。妻は、まだ外套を着ていた。

「……煙草屋の前に、誰かいなかったか？」

と彼は訊いた。妻は怪訝な顔をつくった。

「べつに。誰もいなかったわ」

「ふうん」